

肥後白玉粉

★下益城郡小川町

本県の「白玉粉」は、明治の中頃から小川町で生産されており、「肥後白玉粉」として広く知られている。西日本では唯一の生産地で、全国的にも新潟・東京につぐ生産量を上げている。

主原料はもち米。菓子や料理などの材料として、その用途も広がっている。「肥後白玉粉」は、さいの目に作られているのが特徴。品質もよく、九州一円、沖縄はもとより、関西以南の市場を一手にひき受けている。



▲原料のもち米はひきうすでドロドロになり、そのあと脱水し、型うちされてゆく。

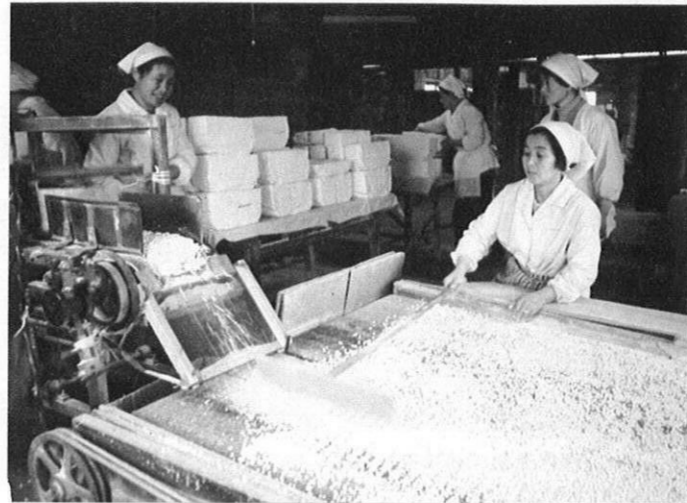


▲できあがった白玉粉の製品

▼大型乾燥機で白玉粉は充分に乾燥される。



◀乾燥した白玉粉は定量づつ袋詰めされる。



▲切断機で小さなサイの目状にかたちがつくられる。



△ここに人あり▽

あるある 樹芸林業家

上益城郡甲佐町田原

宮本 等さん

「サイゴンの街のアカンヤ並木……涼しい木陰をいっばい落としてね、黄色い花が年に二回も咲くんですよ……あれを植えたフランス人は偉いなあといまでもそう思います」、かつて南方に従軍した宮本さん(五二)は想い出を語る。木を植える心には平和があるという話になって調子に熱が入った。ここ数年の間に「樹芸林業」という言葉も耳なれしてきたようだが、まだ一般では「庭園樹づくり」というイメージの域を脱していない。宮本さんに云わせれば「樹芸林業」というのは、植木屋的な狭い考え方ではなく、あくまでも環境緑化、ひいては緑都都市づくり、地域の環境美化問題につながる「もの」で、そこに平和の心も培われていくという。その抱負と自信の程を裏づけるかのように、宮本さんの半生は樹芸ひとすじに支えられてきたようだ。

苗木づくりの夢つちかう

ひと昔前まで、ここ乙女台地は限庄飛行場跡で軍の赤トンボ(練習機)が宙返りしていた。その一隅にあたる田原は、

伝統的な花木づくりの里であった。古老の話では、細川藩時代には会所畑(開拓地)があって、京都出身の代官が、村の人たちに花卉栽培の技術を教えていた。その頃の農家の周辺は四季の花が絶えることなく咲き乱れ、京都椿も多く見られたという。

そんな話を、宮本さんは小さい頃、寝物語によく聞かされた。祖父の代から桑苗や山苗づくりをしてきた宮本家に育った少年の彼は、桑つぎや挿し木が得意だった。戦時中は、中国大陸から南方にかけて戦野をかけ回ったが折にふれて懐かしむことは苗木づくりのことだった。

意を決して樹芸林業へ

復員した宮本さんは、まず家族を支えるための花づくりに精出した。菊をつけたが、連作がうまくゆかず切枝栽培に切替えてみた。だが、市場価格の変動で又苦境に立たされた。この頃宮本さんはつじにとりつかれた。久留米つじの美しさが彼の空虚な心を潤おしてくれた。

先進地の久留米はもとより、広島、岡山へも足を伸ばしてつじの研究に没頭した。周囲の人からは心配されたり白い眼で見られたりもした。だが、遂に意を決した。財産(水田)の大半を処分した資金をもとに宮本さんは樹芸林業に踏み込んだ。はじめ回転の早い品種、例えばつじ、さくら、椿、もくせいなどから手がけた。育った苗木は当時の高麗門

市をはじめ地方のあちこちでたっていた春の市によく出した。

昭和二十七年頃には同業者が十五人になったので宮本さんは緑進会をつくって研究会を活発に開いた。近郊の会場でせり市を開いたのもこの頃だった。樹芸ブームが出てきて昭和三十八年には県の指導で甲佐樹芸組合が発足、宮本さんは庭園部門の責任者になった。

公園や街路 樹が気にかか

見渡すかぎり に横、ヒマラヤ杉・南天・ひいらぎなどの若苗の隊列。フレーム(電熱温室)による育苗管理も軌道に乗った。県の指導を受けながら、かんばつに対抗する冠水施設の研究に目下取り組んでいる。こんな忙しい日課の合間に縫って、宮本さんは婦人会や青年団の人た

ちに頼まれ、いけ花を教える小原流師範が花利用のつもりで」と嫌虚に語る宮本免状の持主でもある。組合の研修旅行に行っても、公園や街路樹を単念に見るくせが抜けない。そんな時、ふと宮本さんの脳裏をかすめるのは、やはりサイゴンで見た壮大なあのアカンヤ並木なのである。

